

○ 自由報告Ⅳ

農業臨時労働力組織と村落

白樫 久（北見工業大学）

村落における社会関係は、生産と生活の双方にわたっているが、その変容は生産力の変化に原因する。現在の農村における部落結合の変容は、基本的な論理としては、生産力の全体としての発展ともにあられ、歴史的には必然的過程である。この分析視角から、この報告は、生産力の一担をになり労働力構成の変化と村落の社会関係の変容を分析することを狙いとしたものである。

わが国における農業経営が家族労働を中心として営まれてきたことはいままでもない。しかし、補助的に、賃金関係をとまわずに農家間で行なわれている「手伝労働」が広く存在し、一方、専業地帯では雇傭労働が年雇、季節雇などの形で存在していた。このうち、「交換労働力（結、手間替）」は、部落結合の一つのかなめとして、「村落社会研究」の重要な分析課題であった。近年の農民層分解の促進が、一部に富農的経営を生み出している中で、農業労働力構成にも若干の変化があらわれた。「分解」の進行が、農村労働力を流出せしめ、中心となる家族労働力が不足すると共に、一部の富農的経営の展開は、絶対的な労働力不足に拍車をかけた。労働力不足は、労働力を媒介とした農民の人間関係を変化させる契機となっている。第一は、「近代化政策」に沿って農業機械の導入、あるいは広域土地改良事業の促進などをめぐっての部落ないし、部落の枠を越えた社会関係が新たに作られた。

第二は、部落の交換労働が全面的に崩壊し、労働力関係を媒介と

した結合が無くなってしまいうような事例。

第三は、「交換労働力」の形態が、「分解」の進行とともに、再編成されるような事例。

第四は、雇傭労働力の増大。この場合も、本格的な農業労働者の出現というより、臨時的なものとしてのその性格は変わらない。

以上のような労働力構成の変化からみる場合、部落的結合は、崩壊、あるいは、変質している、とみることができるといえる。しかし、そのことは村落社会関係の全面的な崩壊ではなく、労働力を媒介としても再編成されているとみることができるといえる。

以上の視点から、本報告は、稲作中核地帯（北海道深川市、上川支庁風連町）、稲作・畑作地帯（名寄市）、酪農地帯（釧路支庁標茶町）の四地域の農業臨時労働力組織の展開を媒介とした村落における社会関係の発展を分析したものである。